

---

# プラチナ・カラー

柚木 空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プラチナ・カラー

### 【Nコード】

N4411A

### 【作者名】

柚木 空

### 【あらすじ】

舞台は古代中国。あらゆる流派が存在し、人々がそれぞれの戦い方で妖魔を退治して生きていた時代の話である。数年前に五霊派の前に倒れていたという名門鳳家の少女・雪華と五霊派の門下生・鈴雨の話。

## プロローグ

ざあああああ………

空から無数の雫が降ってくる。

「長！！調節亜様！」

ばたばたと少女が長の名を呼びながら走ってくる。

「どうした？李陽？」

李陽と呼ばれた少女は息を切らし、長・調節亜の前に立った。

「派門のところに……女兒がひどいけがで倒れているのです！」

「なんだと！？」

周はあわてて立ち上がり、李陽とともに派門に向かう。

雨は一向にやみそうもなく、ますますどしゃぶりになってくる。

「あ！長！！！」

李陽の双子、李月が周を見つけ叫ぶ。

彼女のひざに頭をあて、一人の幼女が倒れている。

見た目は6、7歳ほどで、胸や肩、足などからだのいたるところから血が大量に出ている。

美しかっただろう銀髪はぼさぼさで血がべっとり付いてしまっているうえ、

服はぼろぼろに破け、いままでどのような生活をしていたかは大体予想が付く。

周はその子の姿を見て、思わずつぶやいた。

「いったい………この子は何を………」

チユンチユン・・・

「・・・夢、か・・・」

久しぶりに過去の夢を見たな、と洵はため息をついた。

あれからもう6年近く経つ。

あのころ、まだ長に成り立てだった若い自分も今はもう27歳だ。

「あ、洵様。おはようございます。」

部屋を出ると、李月に出くわした。

「おはよう。李月、小雪はどうしている？」

洵が聞くと、李月はにっこり笑い、

「雪華様はさきほど鈴雨様と朝礼にいかれましたよ。今は五霊山に居られるとおもいますが・・・」

と教えてくれた。

小雪こと雪華は6年前に助けたあの少女のことで、名前は洵がつけたものだ。

胸にあつた鳳凰をかたどった家紋の刺青で、仙術使いの名門・鳳家の者だということがわかった。

しかし、本人は記憶がない上にとんでもない人間不信に陥っていたため、深く探ることもできなかった。そこで、本人が思い出すまで「雪華」という名前をつけたのだ。

「そうか・・・」

「なあ、小雪」

黒髪を頭の上で二つにお団子した少女が小雪に話しかけた。

五霊山はもともととても険しい山だったが、

五年間登り続けた今となつては、もう普通の道を歩くのとおんど変わらなかった。

「・・・鈴雨・・・どうした？」

隣の美しい銀髪を低めの位置でひとつにしばったにした少女 小雪が返事をした。

「うちら、いつまで五霊山に登らなきゃいけないのかなぁ……」  
ため息をつきながら鈴雨は言った。

「だってさぁ……うちらもう五年だよ？節亜様は三年しか修行してないって……」

退屈そうにのろのろと歩き、頂上を眺めてはため息をつく鈴雨に小雪も同情をした。

この五霊山に登り、門下生は修行をするのだが、どうも二人はやたらと修行の年数が多い。

これも凋が組んだメニユーなのだ。

20歳以下で十級門下生にいるのはこの二人だけというほど、二人ともとても優秀なのだが、十級でまだ五霊山に登っているのもこの二人のみなのだ。

「節亜様はあの方なりの考えがあるのだろう」

そう鈴雨にいいながら、自分にもそう言い聞かせた。

五霊山独特の青い霧が見え、頂上についた。

頂上には五霊のとおり、五つの精霊が宿る祠がある。

その祠は丸く並んでおり、その中心には陣が描かれている。

その陣の真ん中に五霊派の門下生なら誰もが持つ、白水晶の腕輪を置き、精霊を呼び集めるのだ。

これによって、腕輪の持ち主は仙術を学ぶことができる。

しかし、小雪と鈴雨はすでにすべての仙術を心得ており、もう登らなくてもいいはずなのだ。

「ふう……戻るか。小雪！」

腕輪の仙力を貯め終わり、鈴雨は小雪に声をかけた。

「……ああ。」

小雪は答えた。やはり、凋が何を考えているのか読み取れない。

十級になった二人を五霊山に登らせると言うことは、きつとなにか五霊派全体にかかわる重大事項なのだろう。しかし今はそんなことなど気にしてはいられない。

修行に専念しよう

「そっぴゃあ、昨日新しい奴が入ったってね。」

鈴雨は思い出したように言う。

「ふーん。」

もちろん小雪がそんなことに興味を持つはずもない。

しかし鈴雨はうれしそうに語り続ける。

「それがさあ、相当すごい奴らしいんだよね」

「どうすごいって？」

『すごい』という言葉に小雪が反応する。

小雪は昔からこうだった。

強いと言われる人には確実に勝負を申し込むのだ。

本人曰く、自分の力試しらしいが一度もまともに小雪と戦えた者を見たことはない。

それもそうだ。

小雪の戦闘能力はずば抜けていて、鈴雨でさえ一回も勝ったことはない。

「なんか・・・ものすごい戦闘能力だとか・・・それでいきなり九級の試験をうけるとかなんとか・・・」

そうつぶやいた鈴雨の声に、小雪は不敵な笑みを浮かべる。

またか・・・と鈴雨がため息をついたのは言うまでもない。

小雪のこの癖は家系からか、それとただ本人が好きでやっているのかわからない。

しかし、小雪はどこか普通の人とちがう。

だからこそ、鈴雨は彼女に話しかけ、親友になろうときめたのだ。

「そいつの試験を見にいくぞ。」

予想をしていた言葉だ。

「あいよ」

鈴雨は了解、とばかりに頷く。

人の試験を見るのはなかなか悪くない。

もちろん試験会場には高等レベルの人しか入れないが、

二人は凋が特別に許可を出している。

凋は二人の実力を最もよくわかっているのだ。

「鈴、雪。」

五霊派に戻ったとたん、二人は凋に呼び出された。

「何ですか？」

鈴雨が聞く。

「新しく入った奴のことだ。柳葵、こちらに来い。」

凋が呼ぶと、美しい長い黒髪の少女が入ってきた。

外見的に12、3歳に見えるこの少女は目がぱっちりとした、  
なかなかかわいらしい子だった。

「紹介しよう。昨日入った柳葵だ。」

「はじめまして。葵とよんでください。」

凋が紹介すると、葵はペコリと礼をした。

「まだ級はないが、近日九級の試験を受けさせる。それまで、彼女  
に指導をしてほしい。」

凋はそう言うと、葵を置いて去った。

「葵、か。私は鈴雨。洸鈴雨だ。よろしく。」

鈴雨はそういい、手を差し出す。

「は、はい！よろしくお願いしますっ！！」

かわいらしく握手に応じる葵に、鈴雨は思わず表情が緩む。

「………鳳雪華だ。」

小雪は無愛想に言った。

「・・・・・・・・・・よろしくお願いします・・・・・・・・」

小雪の態度に葵は戸惑う。

「大丈夫。小雪はいつもあだから。」

鈴雨はそう葵に言った。

しかし実際は小雪に疑問を抱いた。

「どうしたんだ？小雪」

自分の部屋に向かいながら、鈴雨は小雪に聞いた。

「何が？」

「葵にあんなに冷たくすることはないじゃないか。」

鈴雨がそう言うと、小雪は立ち止まった。

「あいつは・・・あいつはどこかがおかしい。」

小雪は苦しげに言った。

「ほえあ？」

あまりにも意味がわからなかったため、鈴雨は変な声を出してしまった。

小雪は相変わらず無表情で、何を考えているのかわからなかった。  
「九級を受けるほど腕が立つというのになぜ私達が指導をしなければならぬ？」

小雪は言った。

当然鈴雨は返す言葉がなく。

「・・・・・・・・・・確かにおかしいな。」

言葉は大きな夕日に飲み込まれたかのように消えた



## プロローグ（後書き）

初めてしまいました・・・。  
これからがんばります!!!!

## 第一話 柳葵（前書き）

五霊派の十級門下生の二人の下に、柳葵という不思議な少女がつくことになった。

そして、柳葵の一日目が、今始まるうとしている

## 第一話 柳葵

おかしい。

おかしい……

雪華は一人自分の部屋で考え込んでいた。

もちろんあの柳葵という少女のことについてだった。

なぜあの少女の教育係が必要なのか……

調節亜が九級を受けさせるほどの実力の持ち主なのに、二人も十級門下生をつけるなんて

絶対に何かある。

雪華はそう確信した。

あくる日。

いつものように五霊山に登ろうとする二人の後ろに背の低い少女がついていた。

そう、葵もまた試験まで一緒に五霊山に登るのだ。

「私、がんばりますっ!」

「五霊山はきついぞ?」

鈴雨と葵が話していた間、雪華は黙っていた。

葵はたまにこちらを気にするようにちらちらと見てきたのだが、雪華は気にせず、そのまま

でいた。しかし、葵がこちらを見るたびに、なきそうな顔をするこ

とには雪華も困った。

「鈴雨、葵。いくぞ。」

雪華は葵に気を使い、わざと名前を呼んだ。それを聞いた葵はうれしそうに顔を輝かせ、

「はいっ！！」と元気な返事を返していた。

数十分後。

三人は山の中腰にいた。ここからが勝負、いよいよ険しくなるところだ。しかし葵はここまで来て息ひとつ乱していない。相当な体力の持ち主だ。もちろん雪華も鈴雨も五霊山に登るなんて朝飯前なのだが、初めて来る人間がこんなびんぴんしているはずがない。ますますこの少女が気になるところだ

険しい山道を登り続け、ようやく五霊山の青い霧が見えてきた。

この青い霧は、一定の高さまで来ないと見えないものなため、まもなく頂上だと言うことが

わかった。雪華はふと後ろを見た。さすがの葵もここまで険しい道を歩き続けるのはつらかったのだろう、二人のだいぶ後ろにいた。

「こ、ここ……たいへ……ん、なんです……ね……」

息切れをしてみごとき言葉が発する葵。

いつか初めて五霊山に登ったときのことを思い出させる。

「ほら、着いた。」

鈴雨がやさしく葵の手を引いた。目の前に見えるのは五霊陣。到着したのだ。

葵は自分の腕輪をはずした。きつとここまでは涸が教えたのだろう。それを陣の真ん中に置

くと、腕輪はほのかに内側から光り、それが消えたときに葵は腕輪を拾い上げた。

こうして葵とともに五霊山に登り続けること一ヶ月。いよいよ試験の日がやってきた。

「これより、九級昇級試験を始める。」

試験官の言葉に受験者はごくつとつばを飲む。

葵は緊張しているのか、ずっと固まったままだった。

「大丈夫だよ」

鈴雨は葵に言った。

葵は少し戸惑い気味にうなずいた。

「第二回戦、柳葵」

「ほら、もう出番だよ？」

葵はばたばたと元気に走り出した。

「準備はいいか？」

闘技場の試験官が聞いた。葵は深くうなずく。その瞬間……

地響きのような低い音が響いた。

「!？」

葵は息を呑んだ。目の前に現れたのは巨大な蛇。そう、この試験はあらかじめ用意された魔

物や妖怪をどのくらい早く倒せるかという試験なのだ。その大きさに葵は一瞬ひるんだ。しかし観客席の雪華の腕を組み、自分の実力を監視しているような視線をみるなり蛇をにらみつけた。

絶対に、雪華先輩に私を認めさせるっつ！！！

「天空につかえる龍よ集え

我が目の前に立つ者をなぎ払い

邪悪を浄化せよ」

葵が聞いたこともないような言葉を並べ始めた。

その瞬間、空から無数の光る雫とともに、美しい青い龍が降りてきた。龍は大蛇を包み込むとそのまま天空へとのぼり、姿が見えなくなった。やがて、空からはひらひらと羽毛のような雪が降り始めた。

葵は見事に大蛇を倒した。

闘技場は一瞬静まり、そして爆発音のような歓声が響いた。

「よくやった、葵。」

帰ってきた葵に鈴雨が笑いながら言った。雪華だけはずっと闘技場の観客席で固まっていた。

「……どうした？」

鈴雨は初めて見る雪華の表情に何かを感じた。

「あの子は……葵は……龍家の者なのか……っ」

雪華は相当動揺していた。

「龍家？」

「そうだ・・・鳳、龍、虎、玄は四大家とよばれていて、その中になにかつながりがあると聞いた。私の仙術の中にも・・・あの術と似たものがある・・・」

雪華は葵をみた。彼女は・・・いったい何者なのか・・・。

「彼女は何者なんです？」

「・・・・・・・・」

雪華は洵の元へ押しかけた。しかし洵は口を開く気はないらしく、ずっと黙っている。

家のことは、雪華にとってはとても重要なことだった。雪華には7歳より前の記憶がない。今、鳳家がどうなっているかもわからないし、唯一家のことを知る手がかりとして、ほかの三家から情報を聞くことだった。

「これだけおしえよう。」

ついに洵も負けたのか、ようやく口を開いた。

「彼女は龍家の者ではない。本人は苗字を柳と言っているが実際は不明だ。」

「なぜ、違つとわかるんです・・・？」

雪華は聞き返した。

「龍家は女に秘術を伝えない。」

つまり、彼女が龍家ならば先ほどの術は使えない、ということだ。そうであるのなら、どうして葵がああ術を使える？

まだまだなぞは深かった。

しかし、6年前の鳳家の事件の鍵をにぎるのは柳葵、彼女だということをもまだ誰も知らなかった。



## 第二話 蓮華（前書き）

九級試験に合格した葵。

しかしなぞはまだ残っていた。

それと雪華と鈴雨が五霊山に登っていることの意味は………？

## 第二話 蓮華

「そんなはずは……」

雪華はずっと考えていた。

じゃあなぜ葵はあの技を使えたのか……。

そう考えている間に、また日が昇った

「はい??」

間抜けな返事を返したのは鈴雨。

「だから、葵は男にしか伝えない龍家の秘伝の技を使える。」

声を低くして、雪華は繰り返した。しかしそれは鈴雨に伝わらないらしく、鈴雨は首を傾げ

るばかりだった。

「葵は女だろ?」

「だから、それがおかしいんだよ……」

雪華は少しむっとしたように答えた。

「じゃあいいんじゃない?」

鈴雨らしい答えだった。雪華はその答えを聞いて、諦めたらしくため息をついた。

もうすこし様子を見るか……

「おはようございます!!」

元気に挨拶してきたのは話題の中心、柳葵だった。

彼女の姿はやはりどうみても女で、雪華はさらに大きなため息をついた。

「あれ?雪華先輩どうしたんですか?」

「なんでもない。」

雪華はそう答えると、席を立った。

「おい、五霊山行くぞ。」

その言葉を聞いて、あわてて二人はついてきた。九級に合格したばかりの葵が一番はりきっていたようだった。

「よし。」

五霊山の頂上の陣から腕輪をとった葵は、うれしそうにいった。

「今日で私の登山もおわり！」

いつもは聞かないような口調で葵は叫んだ。それを聞いた雪華はギロツと恐ろしい目つきで

にらみつけた。葵はそれで縮こまる。

そんな葵を見た鈴雨はあわてて駆け寄り、

「五霊山の頂上は聖地だから騒ぐのは禁止なんだよ。」

といい、葵の肩をぽんぽんとたたいた。

葵は申し訳なさそうに頭を下げていた。

「さ、帰ろう」

鈴雨の言葉に三人は山を下った。

「雪、鈴」

五霊派に帰ったとたん、凋が二人を訪ねてきた。

「葵、お前はそろそろほかの九級門下生たちに混ざれ。仙術はすべておぼえたのだろう？」

「はい！」

葵は凋に言われるまま、あわただしく九級門下生たちのもとへかけていった。

凋はその姿を最後まで見送ると、静かに言った。

「お前たちはこっちへこい」

いつもと感じの違う凋様子に雪華と鈴雨はただ疑問を抱くだけだ

った。

その間にも凋はどんどん進み、気がついたらいつの間にか凋と李陽・李月姉妹しか入れないという礼拝堂の前に着いた。礼拝堂の前にはすでに李姉妹が待機しており、二人は深刻な顔をして立っていた。

「お前たちに五霊派最上級武術のうちの、”蓮華楊”を伝授する。」  
「!？」

突然の凋の言葉に、雪華も鈴雨も驚きを隠せなかった。

「私たちに……ですか……?」

鈴雨が遠慮がちに尋ねた。

”蓮華楊”とは五霊派最上級武術の一節であり、これを習得するには相当な仙力と、体力、そして精神力が必要だった。そして普通の門下生には雲の上のもの、といていいほど習得が

困難な技だった。三つの力のどれかが不足していれば、その人は蓮華楊習得途上の激しい訓練に耐えられず、死んでしまう場合もあるといわれている。

「まさか……そのために私たちを五霊山に……!？」

雪華が息を呑みながら言った。

「……お前たちならできると思った。やるか？」

「はい」

凋の言葉に、二人は即答だった。この技の名前が凋の口からでてさらに習わせてくれる権利を得ることは本当にまれだったのだ。

「李陽、李月」

「はい」

姉妹の返事はまさに双子の神秘と思われるほど息がぴったりだった。

二人は雪華と鈴雨をつれて、礼拝堂の後ろにある道場へ入った。鈴雨には李陽、雪華には李月がついた。

「蓮華楊は、五霊派の創立者が愛するものを護るころから作り出されたといわれる最上級武術のひとつです。これは最上級武術に共通することですが、誰かを護り抜くという強い意志がなければ使いこなすことはできません。」

李陽が説明すると同時に李月は雪華を見つめていた。

あのぼろぼろの女の子がこんなに成長するとは。

雪華は当然その視線に気が付き、不思議に思っていたのだが。

「それでは、基本です。」

李陽が一言言つと、李月も同時に身構えた。その構えは、今まで習ってきたどの武術とも異なるもので、やわらかい動きが特徴的だった。

「すごい……」

初めて最上級武術というものを見た鈴雨は思わず言葉を漏らした。

「まずは構えです」

李姉妹は鈴雨と雪華それぞれにつき、丁寧に教えていた。構えは思ったより難しく、その姿勢を保つだけでも二人は精一杯だった。

「は……っ」

鈴雨はどさりと床に倒れこんだ。

「きつい……」

そしてつぶやくように言った。雪華の方を見ると、こちらもなかなか苦労していた。しかし

雪華の方が体力があつたのか、鈴雨の様に立っていられないということはなかった。

夕暮れ。

あつというまに一日が過ぎた。

李姉妹は二人が帰つたのを確認すると、すぐに涸のもとへと向かった。

「どうした？」

凋は不思議そうに二人を見ていた。

「あの二人・・・とんでもない才能を持っています」

李陽が驚いたように言った。その言葉に凋は笑った。

「当然だろう。じゃなければ最上級なんか学ばせない。」

李姉妹はすこしだけうれしそうに微笑むと、去っていった。

李姉妹がいなくなった部屋で、凋はひとり窓の外を眺めていた。

「そろそろ真実がわかるころだろう・・・。」

「鳳雪華。真実の重さに耐えられるか・・・。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4411a/>

---

プラチナ・カラー

2010年10月29日05時44分発行